

## 4. 相川の住宅

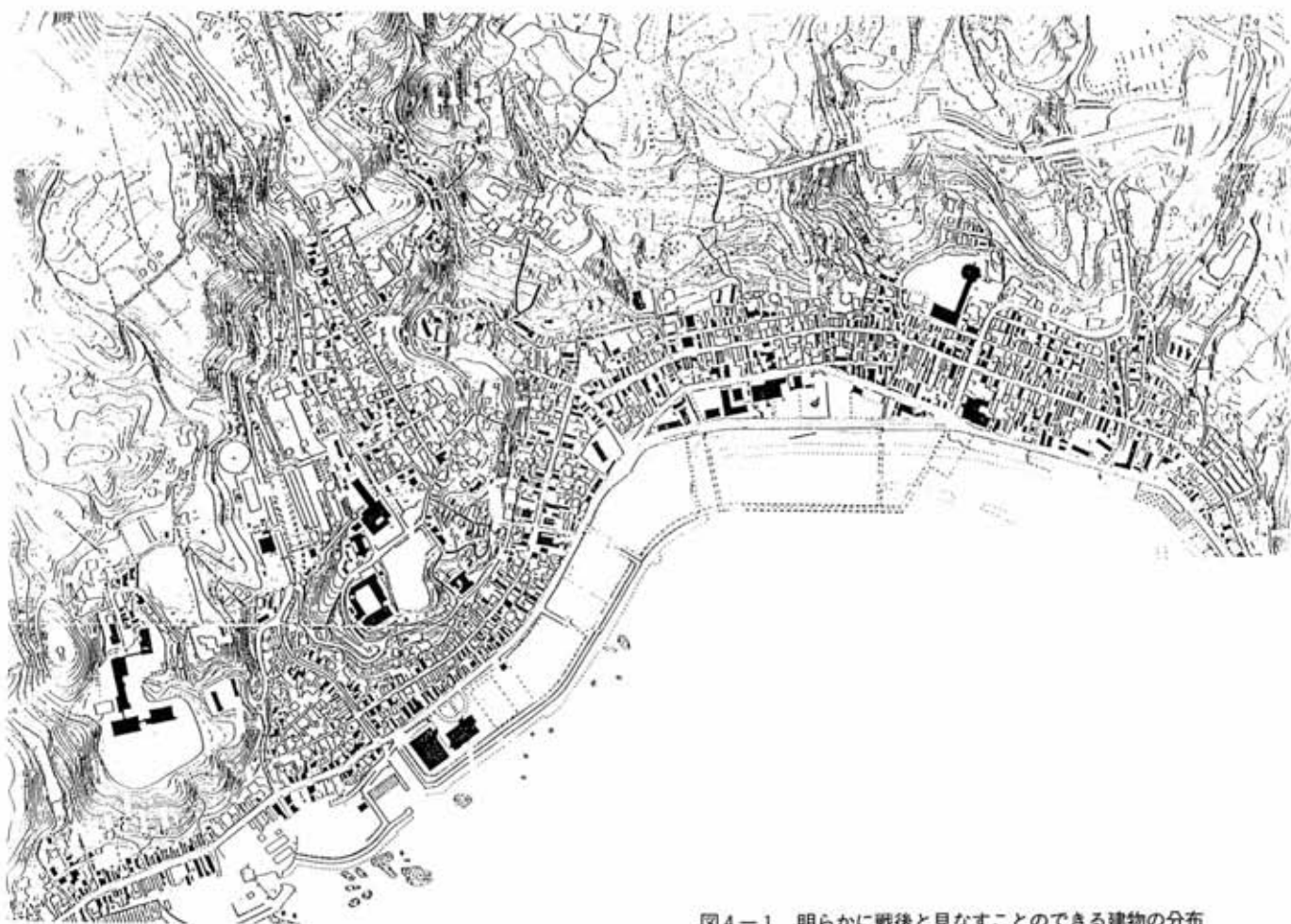


図4-1 明らかに戦後と見なすことのできる建物の分布

### 4.1 相川の建築

相川の建築には、奉行所・鉱山者住宅・町家・漁家・農家・旅籠・寺社・会館・遊廊など様々なタイプがある。このどれもが都市を成り立たせるために必要な施設である。それが東西1.5km南北2kmほどの範囲にコンパクトに分布している。これにより相川には都市性がつくられている。相川の建築の特徴としてこの点を第一に指摘することができる。

また、もう一つの特徴として、こうした諸建築が自然や地形をたくみに利用するかたちで配置されていることがあげられる。地形の利用は、特に鉱山者住宅で顕著にみられ、尾根道に沿った配置やその内部空間にもおよんでいる。これについては、具体的に各項のなかで述べる。

ここでは、相川の建築のうち特に住宅（民家）について、その特徴を調べることにした。とくに鉱山者住宅と町家に注目した。

鉱山者住宅は、他の町にはまったく見られない相川独自の建築類

型である。したがって、この特徴を明確にしておくことはなにより大切に決まっている。一方、町家をとりに上げた理由は、鉱山者住宅と一見似た形態をしているからである。鉱山者住宅と町家がどのような共通点・相違点をもつのかを比較することにより、両者の理解が深まると考えた。

### 4.2 建築の類型化

まず、相川の伝統的建造物を調べるにあたり、建物の分類を行なった。そしてその分布を相川町全域で調査した。

始めに、明らかに戦後と見なすことのできる建物の分布を調査した(図4-1)。そして、この新しい建物を調査の対象から除外することとした。

次に、残ったもの(戦前からの構法をとどめる建物)を以下のように分類した。

①町家(接道しトオリニワをもつ住宅)



図4-2 「道に接する住宅」の分布

- ①-1 町家
- ①-2 間口の大きい町家
- ②鉾山者住宅（鉾山労働者の住宅）
  - ②-1 鉾山者住宅
  - ②-2 間口の大きい鉾山者住宅
- ③屋敷（道との間に塀+前庭をもち、縁がまわる住宅）
- ④長屋
- ⑤農家（在の間取りをもつもの）
- ⑥漁家
- ⑦遊席
- ⑧旅籠
- ⑨その他（寺社、会館など）

## 4.3 分布上の特徴

次にそれぞれの分布上の特徴を述べる。

①町家と②鉾山者住宅に共通する特徴は、道に接することである。そこで「道に接する住宅」の分布をみた（図4-2）。

海岸線に沿って通る道路に面してつくられている。また、旧奉行所よりも山側の尾根筋に沿った道路に面してつくられたものもある。海岸線沿いに広がる町の大部分の住宅がこのタイプであることがわかる。

次に、①町家のうち「道から引きのある住宅」の分布をみた。これは、町家であるので当然隣家とは接している。

この分布は、海岸線沿いに広がる町のなかに所々みられる。道に接した町家を建て替えたものも含まれている。

第3に、③屋敷の分布をみた。おもに台地上の旧奉行所の付近に多いことがわかる。また、海岸線沿いの町の中にも点在している。

4番目に、④長屋の分布をみた。海岸沿いに広がる町でも、台地上に広がる町でも、そのはずれに位置している。

また、⑤農家、⑥漁家、⑦遊席、⑧⑨をあわせて「その他」とし、その分布を示した。



図4-3 調査した住宅の位置

以上をまとめると次のような建築類型と分布域の対応関係がある。

- ①町家 : 海岸沿い・低地
- ②鉾山者住宅 : 台地上尾根筋
- ③屋敷 : 台地上（旧奉行所の付近）
- ④長屋 : 台地のはずれ、相川町のはずれ
- ⑤農家 : 沢筋、浜寄り（直線的な通りからはずれた所）
- ⑥漁家 : 海士町川沿い
- ⑦遊廓 : 水金川流域（大黒屋、しまや、えびすや等）

なお、大黒屋はTEM研究所による実測調査が行なわれている。旧材はゴールデン佐渡に保管。

さて、この上で上記の①②③のうち代表的なものを選び、個別に調査をおこなった。

具体的には、①町家の例として石扣町＜渡辺家＞、下戸町＜椎野家＞・＜西山家＞・＜松栄家＞、京町＜池田家＞、長坂町＜伊藤家＞・

＜村川家＞を、②鉾山者住宅の例として大工町＜瀬川家＞、大工町＜佐々木家＞、大工町＜新保家＞を、③屋敷の例として坂下町＜岩佐家＞、下京町＜梶井家＞の合計12軒を調査した（図4-7）。

調査内容として、各階平面図、断面図、配置図、立面図、痕跡図、写真を採取し、居住者がいる場合には建設年代と部屋名の聞き取りをあわせておこなった。

尚、調査は、1991年9月・1991年11月・1992年6月の3回に分けておこなっている。

## 4.4 相川の住宅

ここでは、相川の住宅の特徴を、それぞれの分類ごとに、調査例に即して説明する。

### 4.4.1 （間口の小さい）町家（①-1）

海岸線に沿ってつづく紙屋町、小六町、材木町、羽田町、下戸町





図4-4a 椎野家敷地図



図4-4b 同 立面図

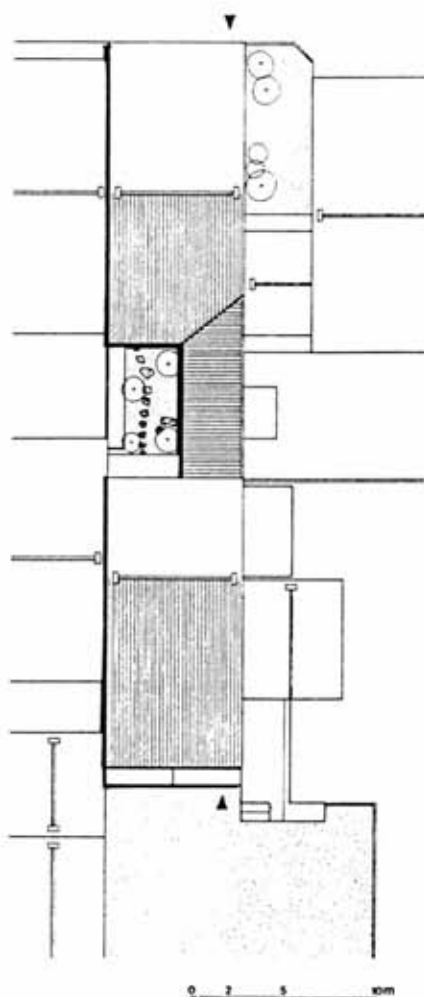


図4-4c 同 配置図

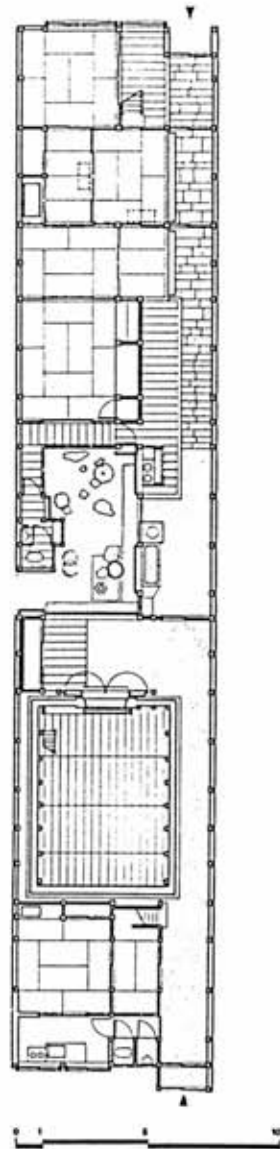


図4-4d 同 1階平面図

に分布する住宅の多くは町家であり、2.5~4間ほどの間口をいっばいに使った2階建てとなっている。これを仮に「間口の小さい町家」と呼ぶことにする。この特徴を、石扣町渡辺家と下戸町椎野家という2つの事例に即して説明する。

#### □ 椎野家住宅 下戸町（図4-4）

##### \*敷地の特徴

椎野家の建つ下戸町や羽田町付近の道は、海岸と平行して直線的に通っている。椎野家は、その最も浜側の道と1つ内陸側（山側）の道との2本の道の間にある。敷地はこの2つの道に面している。間口は4間ほどなのに対して、奥行きは約80間もある。椎野家周囲の下戸浜町の町家は、みなこのような短冊型の敷地となっている。海岸に堤防が建設される以前には、自分の敷地を通して直接浜まで出ることができたといわれている。主な入口は、山側の道に面しており、そちらにミセを構えている。また、敷地の浜側を魚乾燥場として使い、山側のミセ先で干物を売る例も見られる。

##### \*外観の特徴

道との間に塀・垣根ではなく、平入り、2階建ての主屋が直接面している。2階部分は、1尺ほどのもち送りになっている。2階の窓がガラス窓と障子窓との2重になっているのに対して、1階の窓は、1重のサッシになっている。また、入口は幅1間で半間踏み込んだ所に引き違い戸がついている。

##### \*配置の特徴

主屋の背後にクラが配置されている。主屋とクラの間は坪庭となっている。坪庭に面した主屋内にザシキがとられ、トオリニワ内に井戸と水廻りが確保されている。クラの入口も坪庭に向いている。主屋、井戸、クラの屋根は続いているので、内部で行き来できる。

また、クラの背後には、浜側の道から出入りする貸し室が付随している。トオリニワを確保してクラが建てられているために、山側の道から浜側の道まで住宅内部で通り抜けることができる。

##### \*間取りの特徴

1階は、土間部分（トオリニワ）と床上部分とに分かれている。



図4-5a 渡辺家敷地図

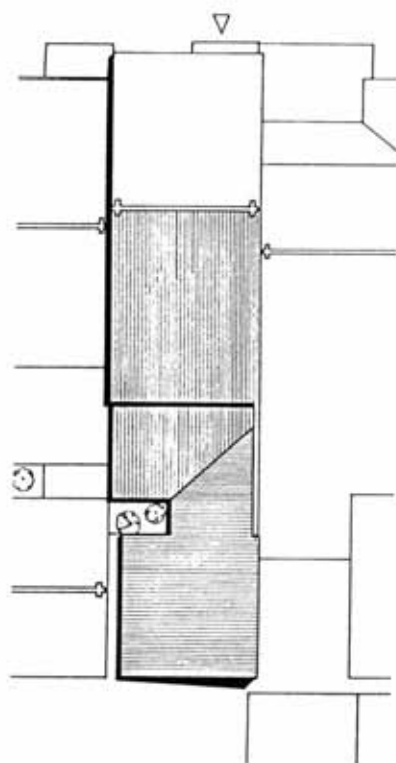


図4-5b 同 配置図

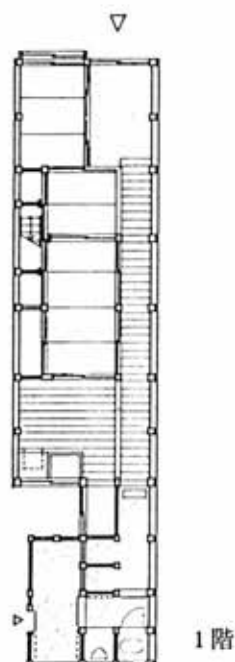


図4-5c 同 平面図

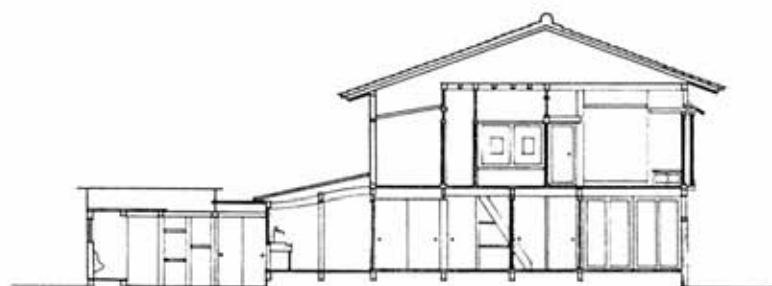


図4-5d 同 断面図

現在空き家のため部屋の呼称はわからない。床上部分は、道側から順にミセ、神棚のあるオエ、床の間のあるザシキへと続いている。ザシキと土間部分との境は壁となっている。2階は、ミセの上部に設けられる。土間やダイドコロの上部は部屋にならず、吹き抜けとなっている。天窗からの光が漆塗りの板壁に光り、トオリニワの雰囲気をよく残している。

安政大火で被災しなかったといわれており、チョウナ仕上げの柱も見られることから、近世末期とも考えられる。

#### □ 渡辺家住宅 石扣町 (図4-5)

##### \*敷地の特徴

紙屋町、小六町、板町、材木町の道も、下戸町と同様に海岸線と平行し、整然と直線的に通っている。ただし、その敷地は、奥行きが道から道までの半分しかない。したがって敷地へのアクセスは前面のみしかなく、住宅は背中合わせとなる。こうした背割り型の敷地は、この付近のほか馬町、羽田村にも多い。渡辺家の場合には、間口約2間、奥行き約9間の短冊状の敷地となっている。

##### \*外観の特徴

下戸町椎野家と同じく平入り、2階建ての主屋が直接道に面している。2階部分のもち送り・2重窓も共通するが、2階開口部が大きく掃き出しとなっている。また、入口は幅1間の引き違い戸でつらいちとなっている。

##### \*配置の特徴

主屋の背後にクラはない。ただし、便所棟を離して建てることにより坪庭を確保している。水廻りは坪庭に面した主屋内部に取り込まれている。トオリニワの先から背後に出られるようになっている。

##### \*間取りの特徴

1階の坪庭に面した部分にダイドコロや井戸があるため、ザシキは2階の道路側にとられている。

2階座敷、開口のとり方により、明治末から大正頃と推定される。

#### 4.4.2 間口の大きい町家 (①-2)

海岸線に沿いの紙屋町、小六町、材木町、羽田町、下戸町にかけ

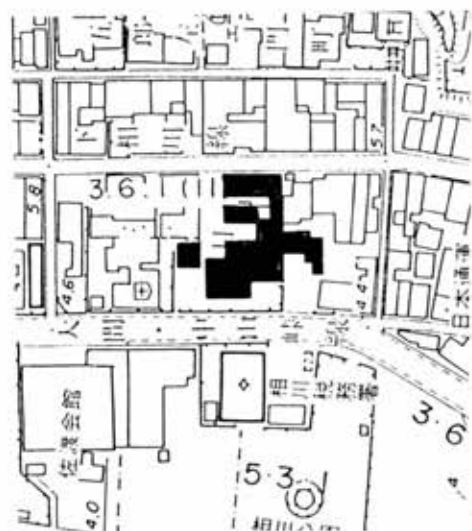


図4-6a 松栄家敷地図

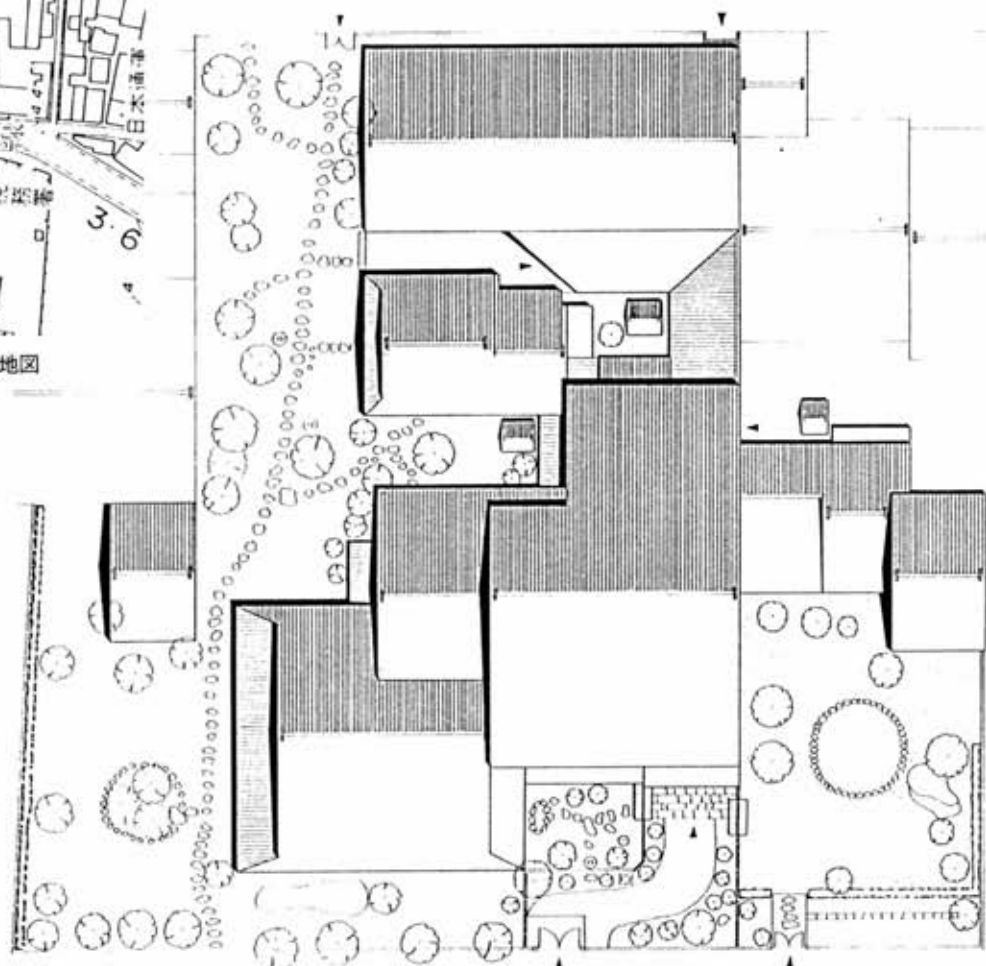


図4-6b 同 配置図

ての住宅には、間口が4間以上ある大型の町家がみられる。これを仮に「間口の大きい町家」と呼ぶことにする。その特徴を羽田町松栄家と羽田町西山家に即して説明する。

#### □ 松栄家 三町目浜町（図4-6）

##### \*敷地の特徴

三町目浜町の道は、海岸線と平行して整然と通っている。松栄家は、下戸町椎野家と同じく、最も浜側の道から1本山側の道までの間にはさまれた敷地となっている。したがって間口約25間、奥行き約25間の敷地は、浜側と山側の両方の道に面している。ただし、浜側の道のさらに海岸寄り（現在公園や駐車場になっているところ）も松栄家の所有地となっているので、堤防ができる以前には海岸線まで延長された敷地として一体的に利用していたと想定される。松栄家は、明治初めまで回船問屋を生業としていた。

羽田町から下戸町付近には、間口10間近くの大きな町家がいくつかみられる。そのなかでも松栄家は最大級のものといえる。

##### \*外観の特徴

海側の道を正面としている。間口いっぱいには建せず、両わきが庭として空いている。また、山側（裏側）の道沿いも1/3ほどが庭となっている。裏側の道沿いには2つのクラが並列している。ただし、クラには下見板張りの覆い屋が架けてあるため、外観からは主屋の一部のように見える。

海側の道に面した主屋はセットバックし、道との間に塀と庭がとられている。塀の高さは2.5mほどもあるが、庭の植栽がそれ以上に高く、道から見越すようになっている。

主屋のうちミセ上部は2階建となっており、格子がはまっている。一方、ザシキ部分は平屋建てで縁が回っている。

##### \*配置の特徴

主屋の背後に離してクラを建てその間を坪庭としている点、トオリニワで正面から背後の道まで通り抜けられる点、主屋からクラまでが一続きの屋根で覆われている点など、下戸町椎野家と共通する。椎野家と異なり、正面は海側を向いている。

##### \*平面の特徴

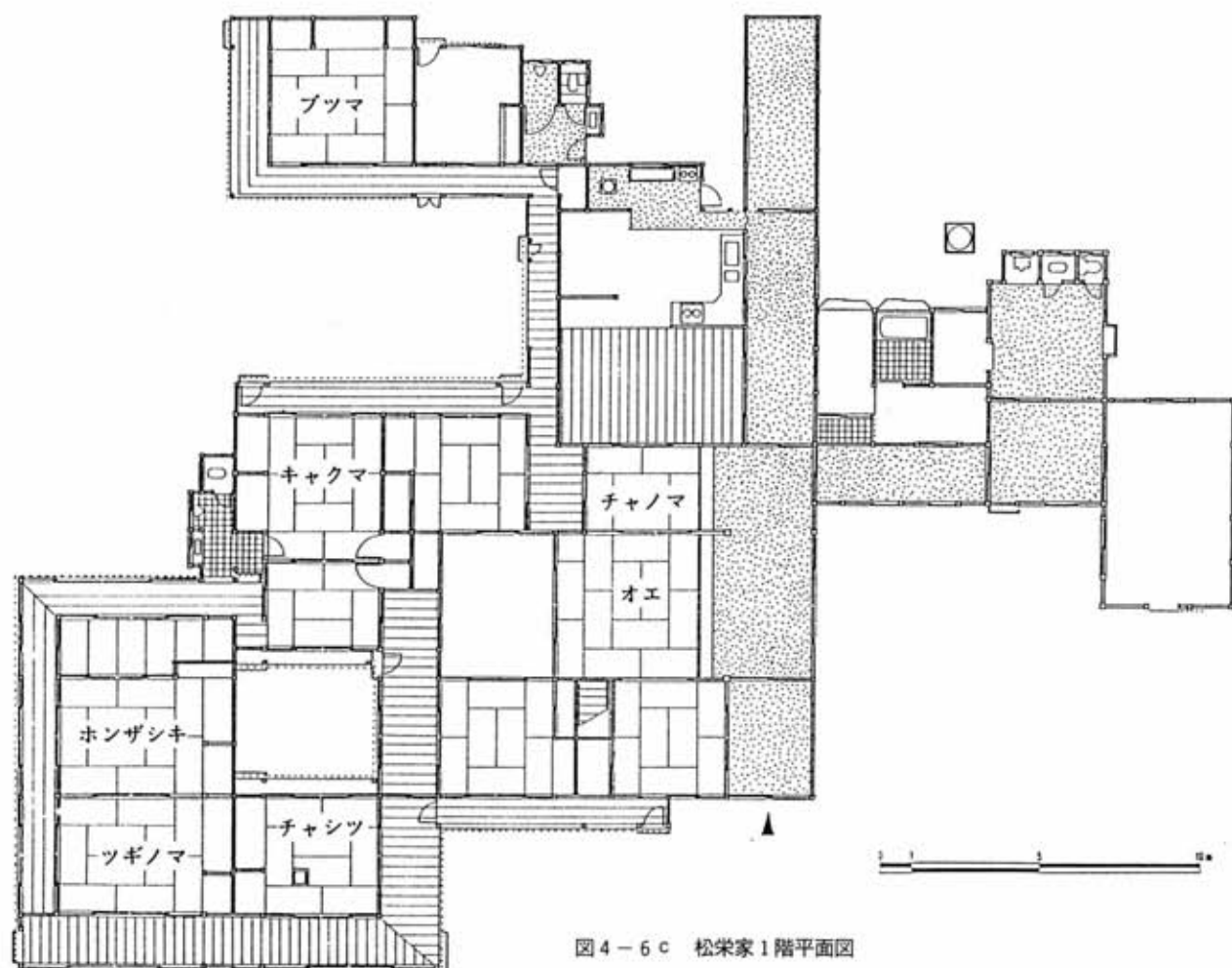


図4-6c 松栄家1階平面図

2列型にザシキが付加された平面型となっている。2列型部分とザシキ部分は、共に7間ほどの間口である。2列型部分では、トオリニワに沿ってミセ・オエ・ダイドコロ（水廻り）と続き、ダイドコロの先に中庭をはさんでクラが位置する。このようなトオリニワ沿いの部屋配列は、「間口の小さい町家」と共通している。また、オエとブツマのトオリニワに面した部分には、建具が入っておらず、開放的な境界となっている。そして、天井もなく、上部では小屋組がオエとトオリニワを跨ぐように架け渡されている。オエの小壁には、トオリニワに向かって大きな神棚がつけられている。トオリニワの庭側上部から光が入るので、オエと合わせて明るく大きな空間となっている。

ザシキは鉤型であり、2列型との間に坪庭がとられている。道側とはとくに柱が少なく開放的な構えとなっている。これは、はね木を入れているために可能になったものと考えられる。ホンザシキでは現在も儀礼（お船玉さま、新年の飾り、節句、御輿の接待、恵比寿講など）が日をきめて丁寧に行なわれている。なお、2階も全てザ

シキであるが、1階とは異なり数寄屋風となっている。3月の節句には2階全体を使って雛人形が飾られる。

なお、現在の家は、大正時代に新築されたものである。しかし、現在から70年以上も前の建物とは思われないほど改造も少なく手入もいきとどいている。ここに大正時代に頂点に達した相川の町家の建築技術とその完成した姿を見ることができる。

#### □ 西山家 二町目町（図4-7）

##### \* 敷地の特徴

二町目町の道は、海岸線と平行して通る2本の道にはさまれた敷地で、両方の道からアクセスできる。ただし、松栄家よりも一つ山側に寄った区画に建つ。敷地は、間口約10間、奥行き約14間の矩形となっている。

##### \* 外観の特徴

間口いっぱい建てるのではなく、正面の道沿いの両わきを庭として空けてある点、裏側の道沿いの北西側を庭としている点、ともに松栄家と同じ構成となっている。また、裏道沿いに並ぶクラに下

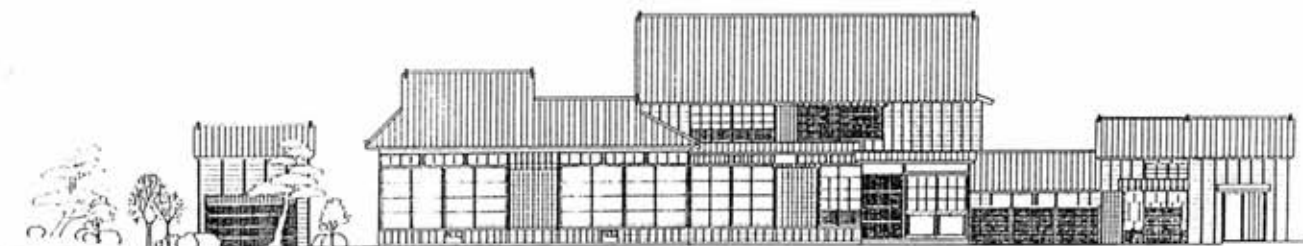


図4-6d 松栄家立面図



図4-6e 同 立面図 (道路側)

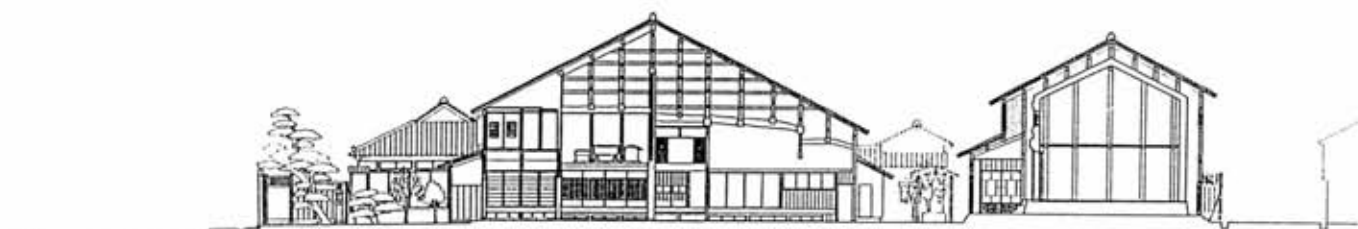


図4-6f 同 断面図



見板張りの覆い屋を架けて、表側と同じ外観としている点も松栄家と共通している。

主屋は、海側の道を正面とし、1間ほどセットバックして建つ。道と主屋との間に塀はなく、わずかな植栽がほどこされている。主屋の正面は杉板で覆われており、窓には格子が入っている。また、主屋の西側には塀が続いている。

#### \*配置の特徴

主屋の背後に坪庭をはさんで2つのクラが並列している。「オモクラ」、「シチクラ」と呼ばれ、それぞれ嘉永、文政の棟札がある。クラと主屋の間はトオリニワで連絡され、一続きの屋根でおおわれ内部で行き来ができる。入口から奥行き方向に、主屋、坪庭、クラと並ぶ配置は、間口の小さい町家と共通する。また、両隣の家と軒を接している点も間口の小さい町家と共通する。

主屋が接道するのに対して、ザシキ部分は道との間に2mほどの塀がある。またザシキには縁が回り、外は庭となっている。

敷地全体でみると間口3間分の座敷のゾーンが2列型部分に付加

している。そして2列型のゾーンが接道するのに対して、座敷のゾーンは前後の両方の道に対して塀と庭をもって接する。

#### \*間取りの特徴

2列型にザシキが付加された平面型となっている。この点で松栄家と共通した構成といえる。ザシキ部分の大きさの違いがそのまま両者の面積の差となっている。

オエがトオリニワと一体となっている点、そこに高い位置から光を入れている点も松栄家と共通する。トオリニワに沿ってミセ（ロクジョウ）・オエ・ダイドコロ（水廻り）・クラと続く点は、間口の小さい町家と共通している。

大正1年に新築された。普請関係の図面のほか、以前の住宅の正面写真が残っている。

#### 4.4.3 間口の小さい町家（中京町）(①-3)

相川には、海岸線と平行に道の通る町（紙屋町、小六町、材木町、羽田町、下戸町など）とは別に、旧奉行所から鉾山へと至る、海岸



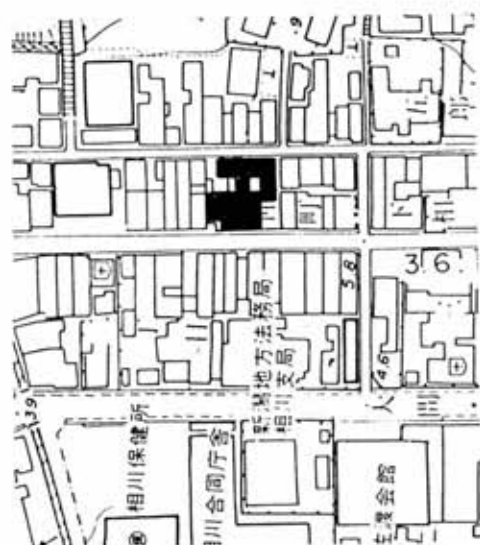


図4-7a 西山家敷地図



図4-7b 同 外観

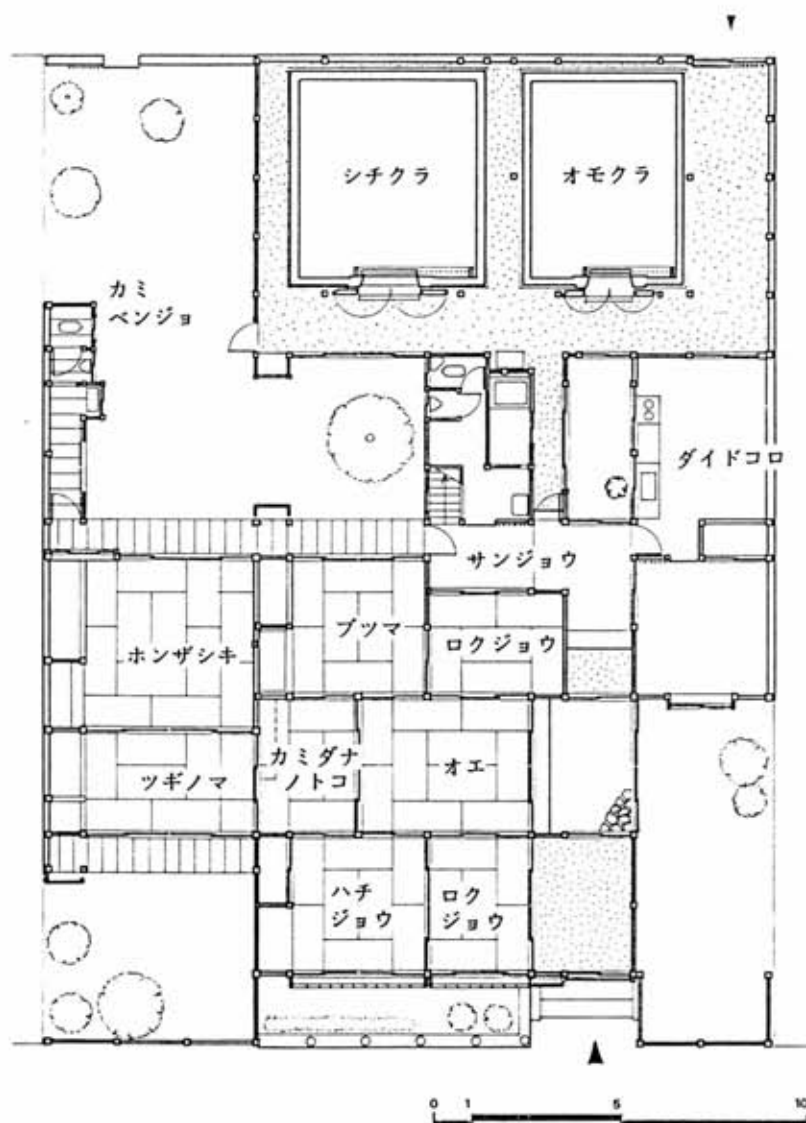


図4-7c 同 1階平面図

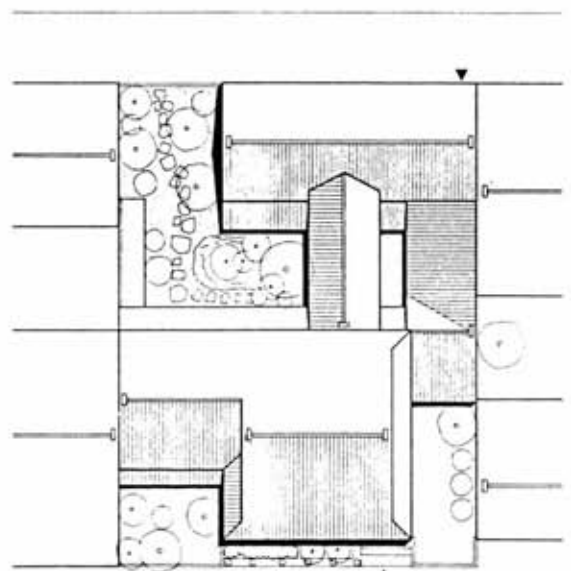


図4-7d 同 配置図





図4-8a 池田家敷地図

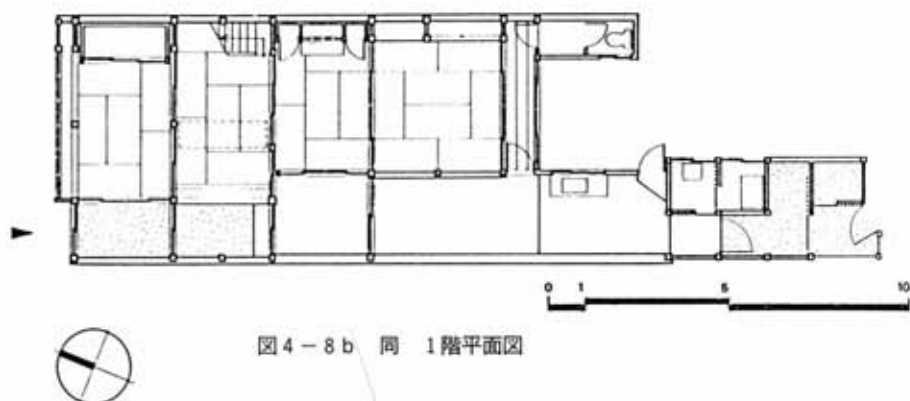


図4-8b 同 1階平面図

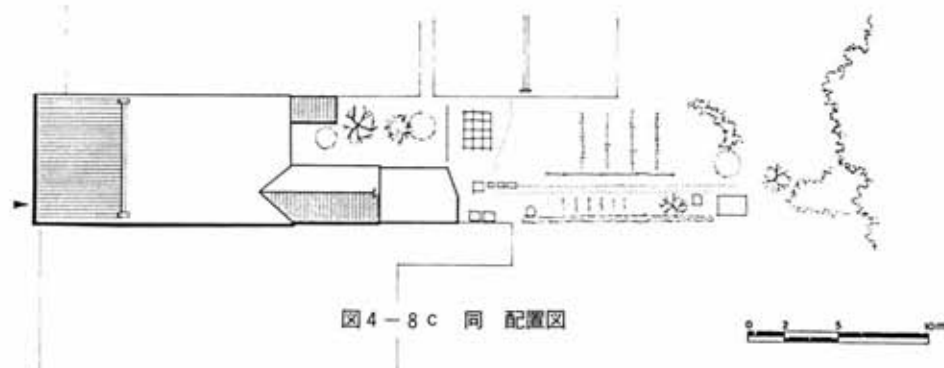


図4-8c 同 配置図



図4-8d 同 断面図

線と直行した道沿いに広がる町がある。この尾根筋の町にも、鉾山者住宅、屋敷などのほかに町家が分布している。それは、主として京町（上京町、中京町、下京町）にみられるが、①-1間口の小さい町家とは立地が異なるので、別に分類することとする。

#### □ 池田家住宅 中京町（図4-8）

##### \* 敷地の特徴

京町の町家は、鉾山と奉行所とを結ぶ道の両側に広がっている。この道は尾根道であるために、敷地は奥行き方向に傾斜している。中京町池田家住宅の敷地は、間口約3.5間、奥行き約20間の短冊型となっている。敷地へのアプローチは、正面からの道に限られる。

##### \* 外観の特徴

2階建ての主屋が接道している点は、浜側の町家と共通する。ただし、2階部分はもち送りではなく、小さな1重窓になっている。逆に1階の窓は、ガラス・障子の2重で出格子がついている。

##### \* 配置の特徴

敷地の奥行きのうち、後ろ半分は庭となっている。ザシキに面し

た一部分が鑑賞庭になっているだけで、あとは蔬菜がつくられている。この畑の先は急な斜面となりタブなどの林となっている。また、この庭・畑には、主屋の内部を通らないとアクセスできない。

##### \* 間取りの特徴

1階の間取りは、浜側の町家と同じになっている。ただ、トオリニワを床土化して食事室としている。オエは天井が高く、神棚がある。ミセとオエの上部が2階となっており、両者は、階段でつながっている。1階の天井高さに合わせて床レベルが変化させ、天井裏を有効に利用している。また、ザシキの上部には、登り梁が使われている（図4-8d 池田家断面図）。

#### 4.4.4 間口の小さい鉾山者住宅（②）

旧奉行所から鉾山へと至る、海岸線と直交した尾根道の上の方に大工町がある。大工町には、鉾山者住宅、屋敷などが分布している。

ここでは、大工町に最も多い小規模な鉾山者住宅を「間口の小さい鉾山者住宅」とし、その特徴を佐々木家の事例に即して説明する。



図4-9a 佐々木家敷地図

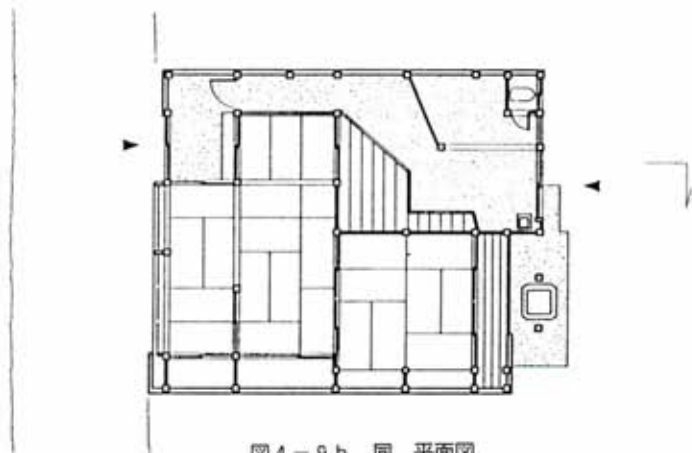


図4-9b 同 平面図



図4-9c 同 断面図

#### □ 佐々木家住宅 大工町 (図4-9)

##### \*敷地の特徴

大工町の「間口の小さい鉾山者住宅」の敷地は、奥行きも小さい。佐々木家の場合、間口4.5間、奥行き約8間である。これは、尾根道沿いのために、敷地が奥行方向に傾斜しているためと思われる。敷地の背後は、すぐに急な斜面となりタブ林がひろがっている。

##### \*外観の特徴

浜側の町家と同じく、主屋が軒を連ねて道に面している。しかし、主屋が平屋建てであること、トオリニワの幅が1.5間あること、入口の引違い戸が外壁と揃った位置にあることなどの点で町家とは異なっている。また、入り口の引き違い戸の上部に小さな窓があり、内部の土間の奥の床上を明るくする工夫がなされている。1階の窓に出格子がつき、ガラス・障子の2重窓になっている点は、中京町の町家と共通する。

##### \*配置の特徴

主屋の裏には、若干の庭がひろがっている。この庭には、一旦主

屋の内部を通してアクセスする。ここには、果樹が植えられたり、蔬菜がつくられたり、井戸が掘られていたりする。

##### \*平面の特徴

現在空き家となっているため部屋の呼称はわからない。

トオリニワがあり、1階の床上部分が道側から順にミセ、オエ、ザシキと続く構成は、町家と共通する。オエ上部には、1.5間の神棚があり、町家と同様にここを居間として使用していたと考えられる。一方、ミセが奥行きの浅い5畳間となっており、町家とはかなり異なっている。後述するように長坂町の村川家は、これと似た間取りをもち、ミセを接客用の部屋として使っていた。したがって佐々木家でもこのような使い方がなされたとも考えられる。

また、土間部分の幅は1.5間あり、オエが張り出すかたちとなっている。そして、オエよりも奥の土間部分に流しや便所が組み込まれている。これは、町家の流しや便所がトオリニワの延長上に別棟としてつくられるのとは異なっている。この理由として、主屋の裏側に傾斜がひろがり、畑を確保するためにも主屋をできるだけコンパ



図4-10a 新保家敷地図

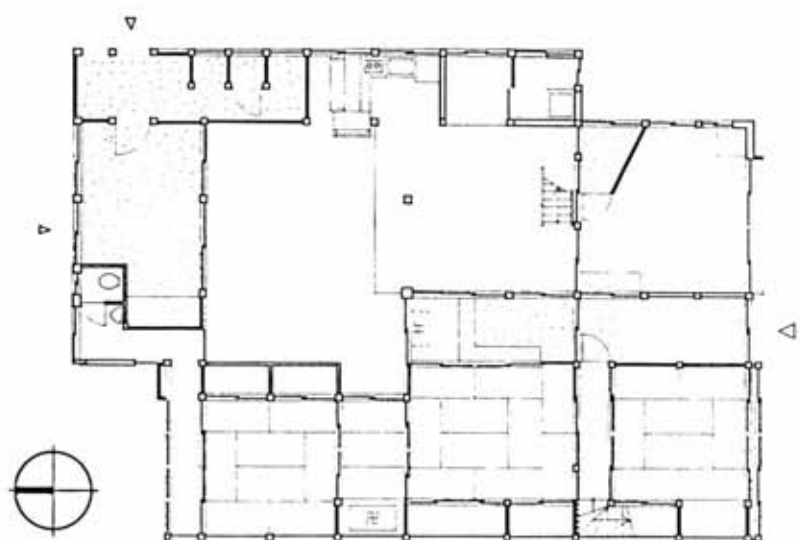


図4-10b 同 1階平面図

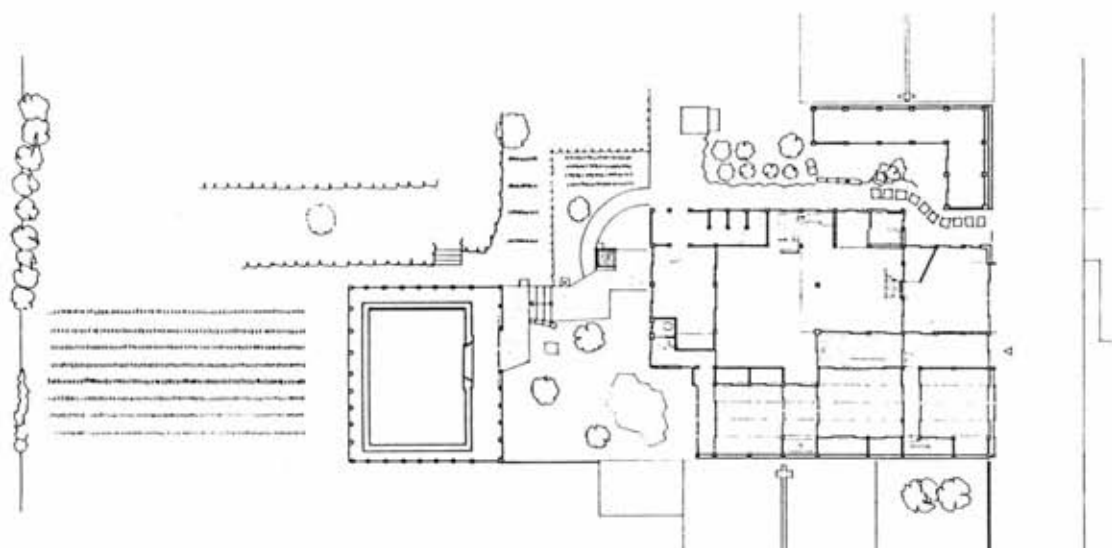


図4-10c 同 配置図

クトにする必要があったものと考えられる。

#### 4.4.5 間口の大きい鉾山者住宅 (②-2)

大工町には、少数ながら間口の大きい鉾山者住宅も存在する。

ここでは、その特徴を新保家の事例に即して説明する。

##### □ 新保家住宅 大工町 (図4-10)

###### \*敷地の特徴

間口の大きい鉾山者住宅の敷地は、間口の小さい鉾山者住宅と比較して奥行きにより大きな違いがある。大工町 新保家の場合、敷地間口は約9間、奥行きは約30間となっている。同じ尾根道沿いとは思えないくらいの違いがある。また、敷地の背後斜面は北沢の照葉樹林帯となっている。

###### \*外観の特徴

2階建ての主屋が接道しているが、2階部分がセットバックしていること、2階の窓は小さいこと、これらの点で浜側の町家とは異なっている。また、入口の引き違い戸が外壁と揃った位置にある

こと、1階の窓がガラス・障子の2重窓になっていること、間口の小さい鉾山者住宅と共通する。

###### \*配置の特徴

浜側の町家と同じく主屋の奥にクラを配置している。しかし、その距離が離れており、間は坪庭ではなく、池・築山を備えた鑑賞庭となっている。クラの奥にはさらに畑がひろがり、果樹や蔬菜がつくられている。また、トオリニワの脇、間口の1/3ほどを庭にしているが、鑑賞庭とせず、奥の畑に通じる作業庭としている。

###### \*間取りの特徴

1階の間取りは、浜側の町家や間口の小さい鉾山者住宅と共通する。新保家の場合には、奥行き方向に緩く登る地形に合わせて、ミセ、チャノマ、ブツマと一段ずつ床レベルが上がっている。また、ザシキは、2階に続き間として確保されている。

文政年間に建てられたと言われている。





図4-11a 梶井家敷地図



図4-11b 同 平面図

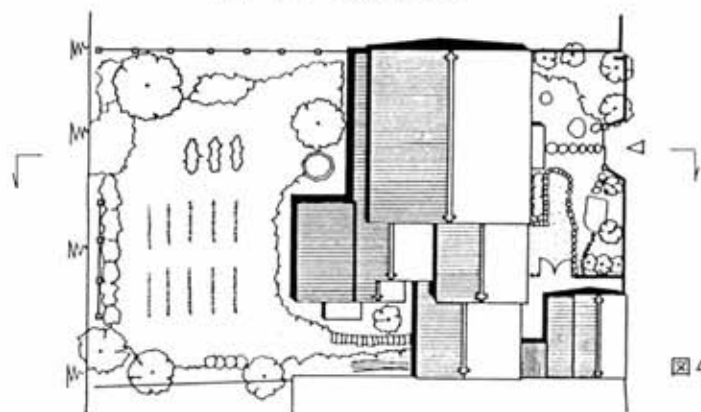


図4-11c 同 配置図



図4-11d 同 断面図

#### 4.4.6 屋敷 (③)

旧奉行所から鉾山へと至る尾根道の奉行所に近いところ、味噌屋町、会津町、四十物町付近には、屋敷が分布している。

ここでは、その特徴を中京町 梶井家の事例に即して説明する。

##### □ 梶井家住宅 中京町 (図4-11)

###### \* 敷地の特徴

奉行所に近い味噌屋町、会津町、四十物町周囲の道は、整然とした格子状となっている。そして道と道との間を前後に分割した背割り型の敷地が多い。中京町 梶井家の敷地は、間口約9間、奥行き約15間である。敷地内は平坦であり、背後の隣地との境界は、高さ3mほどの石垣になっている。

###### \* 外観の特徴

平屋建て住宅が間口いっぱい建つ。ただし、主屋はセットバックし、道との間は塀+庭となっている。塀は人の背丈くらいの高さのため、庭の落葉樹が道から見える。また、主屋の前面は縁が回り、掃きだしの建具が入った開放的なつくりとなっている。

###### \* 配置の特徴

主屋の背後は、ザシキの近くに鑑賞用の木が植えられるものの、大半は蔬菜がつくられる畑となっている。主屋の背後の畑には、屋内のダイドコロを通して行く。むしろ特徴的なことは、主屋の前面、塀と主屋との間に鑑賞庭が確保されることである。これにより玄関までのアプローチ路や座敷からの景色が演出されている。

また、クラも前面の道路側に配置されている。

###### \* 間取りの特徴

玄関があり、中廊下でザシキとダイドコロに振り分ける中廊下型平面となっている。ダイドコロは改装され、便所の庭側にベンキョウベヤが増築されている。

のし瓦の文様に三菱のマークが入っている。かつて鉾山病院の副院長が住んでいたといわれている。

#### 4.4.7 長坂町の住宅 (④)

長坂は、浜側に広がる町と、奉行所から鉾山にかけて広がる台地



図4-12 a 伊藤家敷地図



図4-12 b 同 立面図

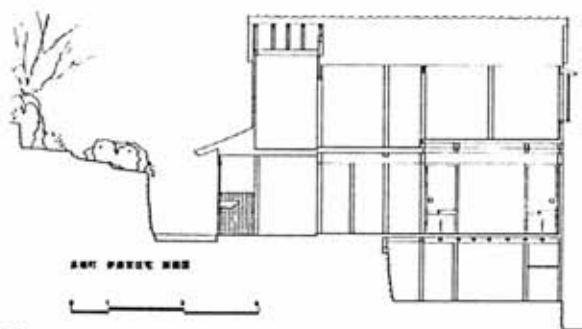


図4-12 c 同 断面図

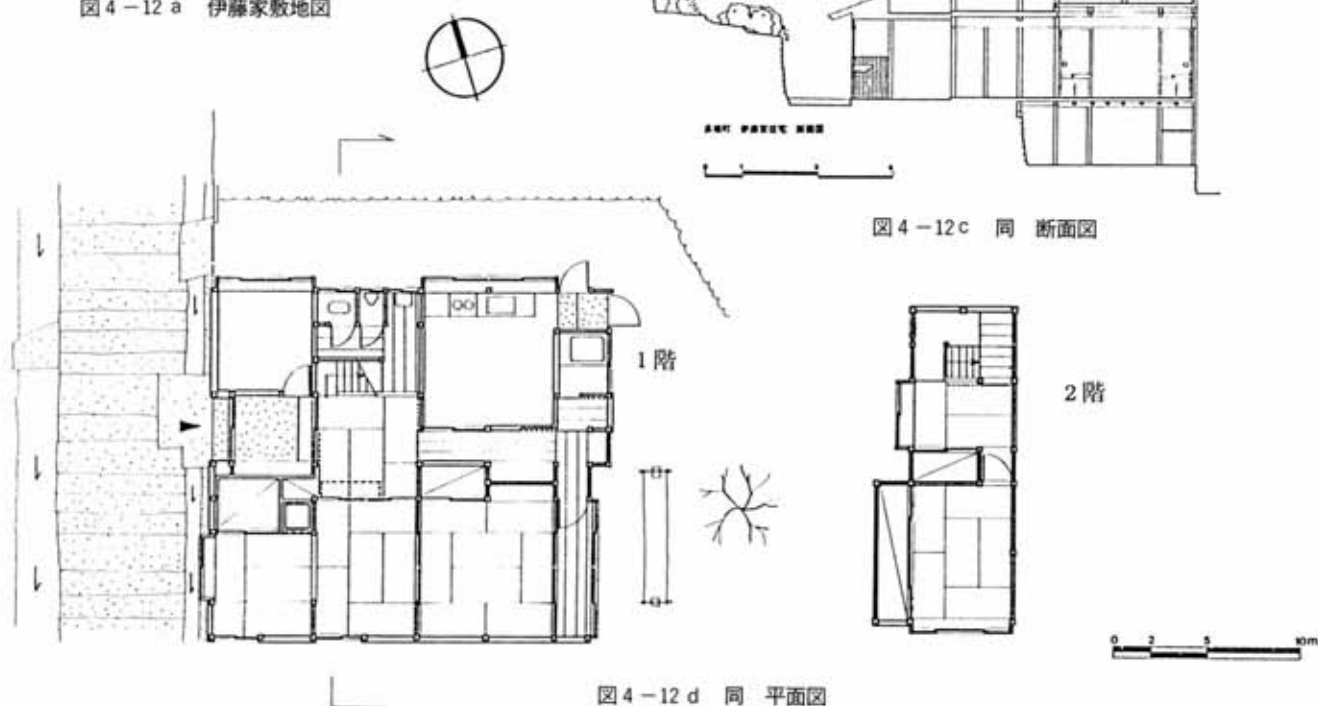


図4-12 d 同 平面図

上の町とを結ぶ相川町の重要な坂である。

この坂に建つ住宅は、景観上も重要な位置にあり、特徴的なつくりかたをされているので、特に独立して扱うこととする。

ここでは、伊藤家、村川家を事例として説明する。

#### □ 伊藤家住宅 長坂町 (図4-12)

##### \*敷地の特徴

長坂は、海に向かう斜面の尾根につくられた階段である。したがってその両側の住宅は、等高線に沿って立地することになる。この点で傾斜の大きさに違いこそあれ、大工町の鉾山者住宅と似た敷地条件となっている。

長坂町の伊藤家の敷地は、間口約6間、奥行き約8間である。敷地のうち、隣地との境界は石垣になっている。

##### \*立面の特徴

2階建ての主屋が接道している。また、1階・2階の窓ともに小さい。海側に面して2階に窓がとられることもある。

敷地間口のうち海寄りに寄せて主屋が建てられる。山側に庭がと

られており、前面は塀となっている。

##### \*配置の特徴

主屋の山側には、幅1間ほどの平坦な庭が確保されている。トオリニワのように主屋の裏側の畑まで通じている。また、主屋の裏の畑には、果樹が植えられたり、蔬菜がつくられたりしている。

##### \*間取りの特徴

1階の間取りは、ほかの町家や鉾山者住宅と共通する。ここでは特に、海側に下り坂になった地形に合わせて、床下収納を確保している点が注目される。また、2階はミセの上部ではなくオエの上部につくられている。

安政5年の棟札あり。明治終わり頃購入。昭和10年に2階増築。

#### □ 村川家住宅 長坂町 (図4-13)

伊藤家に隣接した海岸側に位置する。伊藤家と同じくミセ・オエ・ザシキの下側を収納としている。



図4-13a 村川家敷地図

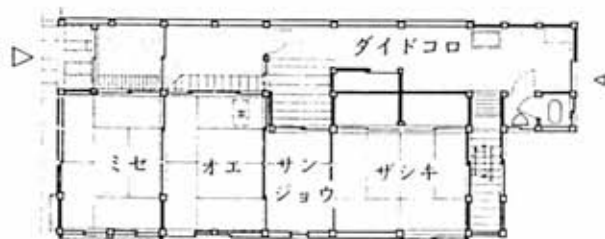


図4-13b 同 平面図

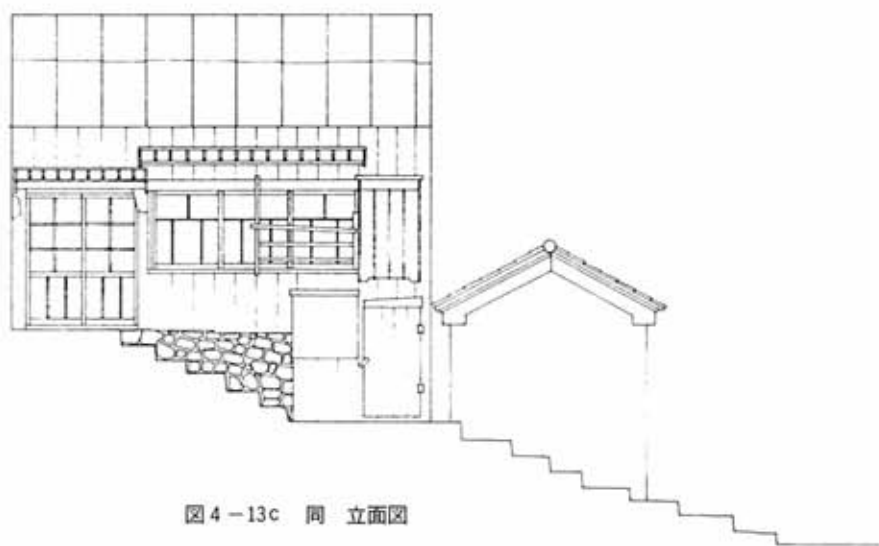


図4-13c 同 立面図

## 4.5 相川の住宅の特徴 — まとめ

さて、以上のまとめとして、相川の住宅の特徴を3つ指摘しておきたい。

### 4.5.1 間取りの特徴

まず、相川の町家の間取りは、北陸地方一帯にひろがる町家の間取りと同じ構成といえる(図4-14)。そして、鉾山者住宅の間取りもミセ・オエ・ザシキと続く部屋の配列の点で町家と同じである。ただし、流しや便所が主体構造のなかに組み込まれること、ミセの奥行きが浅いなどの相違点がみられる(図4-15)。なかでも、敷地の勾配を利用するかたちで、床のレベルを変化させたり、床下に収納を確保したりする点は、尾根筋の住宅の特徴といえる(図4-16)。

### 4.5.2 構法上の特徴

相川の町家には構法上の特徴もある。それは、椎野家(図4-4)や池田家(図4-8)にもみられたように、オエを和小屋で組み、

その前後のミセとザシキに登り梁が使われている点である。このように主屋は、一つの構造体としてつくられている(図4-17)。

### 4.5.3 敷地形式と住宅形式との対応

また、敷地条件ごとに住宅の型(特に配置形式)が異なることも相川の特徴である。

既に相川の都市形成史の章で触れられたことであるが、相川の建物立地は、A.「台地上」、B.「海岸沿い」、の二つにわけられる。そして、それぞれが敷地条件・道路条件によってさらに二つに分けられるのである。すなわち、A.「台地上の住宅」は、A-a「尾根道に面した敷地」、A-b「背割り型の敷地」の二つに分かれ、B.「海岸沿いの住宅」は、B-a「背割り型敷地」、B-b「道と道にはさまれた敷地」の二つに分けられる。

ここでは、これまで説明してきた建築分類ごとの事例を以上のような敷地条件から見直すことにする。特に、その断面図に表れる配置形式に注目する。

A. 台地上の住宅

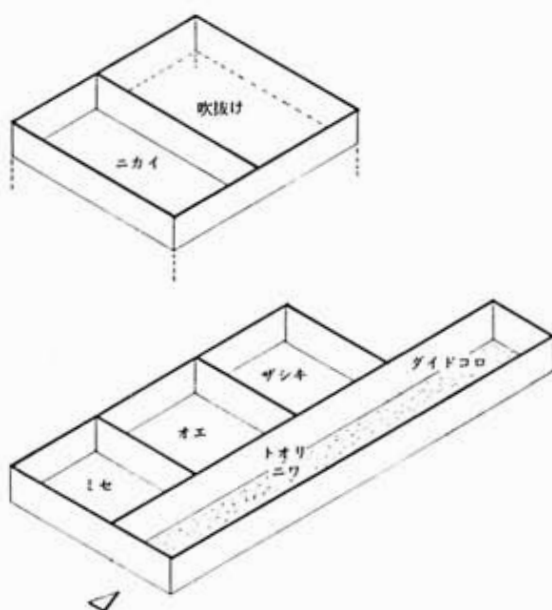


図 4-14 町家の空間構成

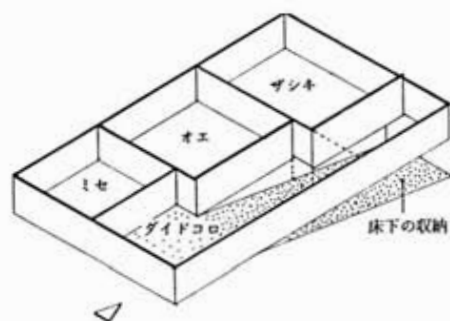


図 4-16 a 鉾山者住宅 (ザシキ床下の収納)

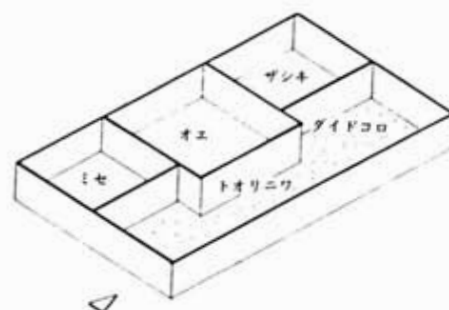


図 4-15 鉾山者住宅の空間構成

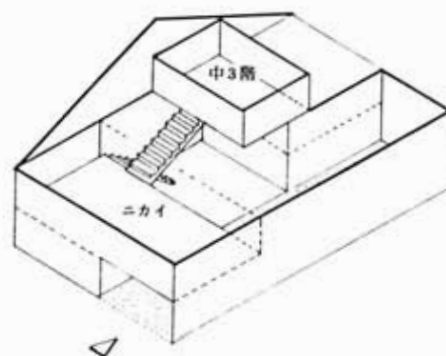


図 4-16 b 中京町 (屋根裏の中3階)

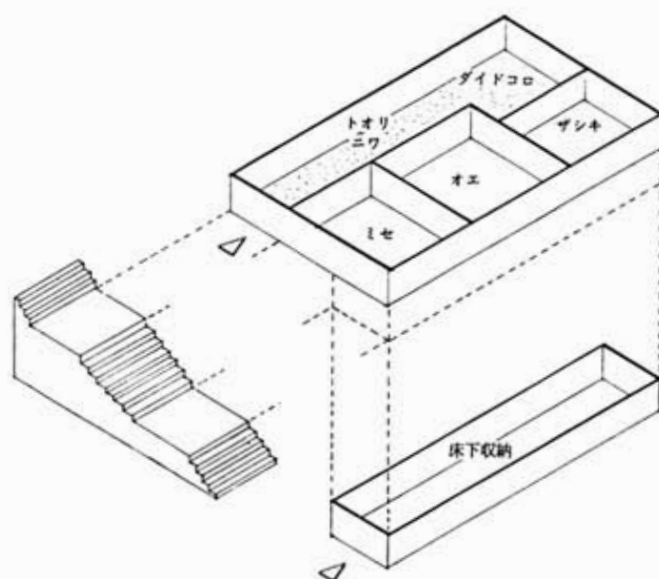


図 4-16 c 長坂町の住宅 床下収納

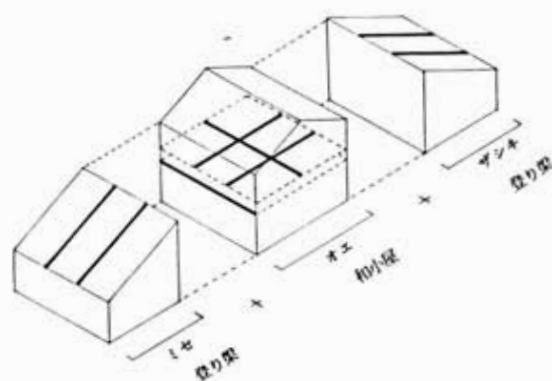


図 4-17 町屋の空間序列



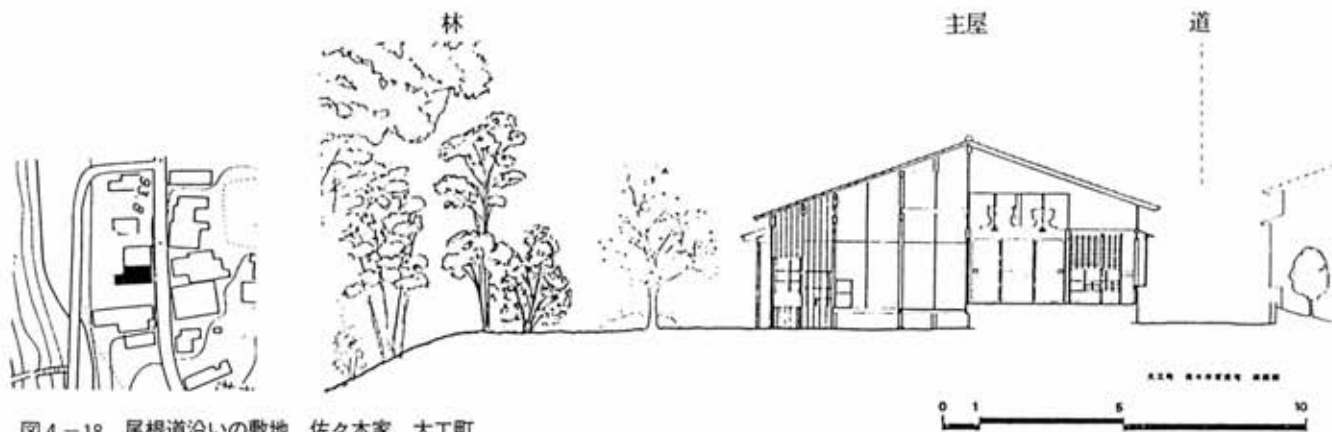


図4-18 尾根道沿いの敷地 佐々木家 大工町

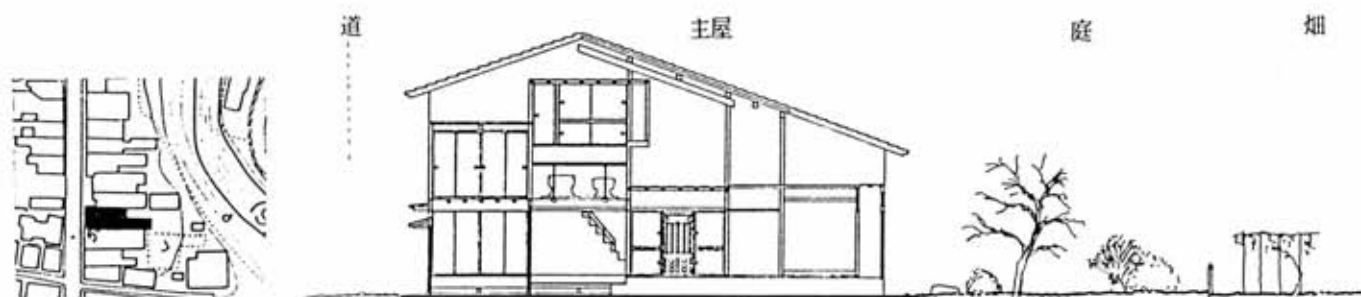


図4-19 尾根道沿いの敷地 池田家 中京町

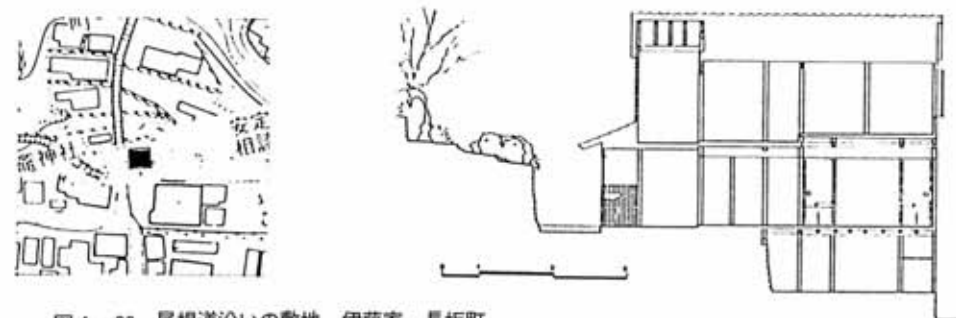


図4-20 尾根道沿いの敷地 伊藤家 長坂町

#### A-a 尾根道に面した敷地 (図4-18)

この敷地に該当するものとして、間口の小さい鉱山者住宅 (瀬川家、佐々木家)、間口の大きい鉱山者住宅 (新保家)、中京町の町家、長坂の町家が挙げられる。ただし、敷地利用についてはそれぞれ違いがある。ここではそれを明確にしておきたい。

##### 間口の小さい鉱山者住宅 (瀬川家、佐々木家)

道にも両隣の家とも接して建つため、立面が町並みをつくる。敷地の背後には若干の庭があり、すぐに照葉樹林の生い茂る傾斜地となっている。

##### 間口の大きい鉱山者住宅 (新保家)

間口の小さい鉱山者住宅と同じ。敷地の奥行きが大きい分だけ背後の畑も大きい。その背後は照葉樹林の茂る傾斜地となる。

##### 中京町の町家 (池田家) (図4-19)

道に接した総2階建ての立面が町並みをつくる。敷地の背後は鑑賞用の庭と畑とがある。畑の先は照葉樹林の茂る傾斜地となっている。また、2階の床レベルを変えて天井裏を有効に使っている。

##### 長坂の町家 (伊藤家、村川家) (図4-20)

道に接して建ち、立面が町並みをつくる。敷地の背後はすぐに傾斜地となっているため、畑は左右の平坦な土地に確保されている。斜面に石積みをする事で平坦な面を作り出しているが、その幅は3~4mほどしかない。建物を平坦面から海側へずらして配置することにより、張り出した床下には収納を確保し、山側の空いたスペースには通り抜けの動線を確保している。

#### A-b 背割り型の敷地 (図4-21)

##### 屋敷 (梶井家、岩佐家)

道との間にあきがあり、そこに塀と鑑賞庭が確保されている。敷地の背後は平坦な畑になっており、背割りの境界線を石垣としてレベル差を処理している。したがって石垣の高さは3mほどにもなる。また、建物の前面も縁の付いた開放的なつくりとなっている。

#### B. 海岸沿いの住宅

##### B-a 背割り型敷地 (図4-22)

##### 間口の小さい町家 (渡辺家)

道に接した総2階建ての立面が町並みをつくる。敷地の背後には軒高の低い便所・風呂を配置し、間を坪庭としている。座敷を2階



図4-21 背割り敷地 梶井家 中京町



図4-22 背割り敷地 渡辺家 石扣町



図4-23 両側道路の敷地 松栄家 羽田町

に確保し、1階の坪庭に面した部分はガイドコロとするなどコンパクトな間取りとなっている。

B-b 道と道にはさまれた敷地 (図4-23)

この敷地に該当するものとして、間口の小さい町家(椎野家)、間口の大きい町家(松栄家、西山家)の両方の例がある。ただし、断面図にみられるように敷地利用にはそれほど相違点はない。

間口の小さい町家(椎野家)

道に接した総2階建ての立面が町並みをつくる。敷地の背後にはクラを配置し、主屋との間を坪庭とする。トオリニワが主屋からクラまでをつないでおり、前後の道のどちらからもアクセスできるようになっている。

間口の大きい町家(松栄家、西山家) (図4-23)

松栄家の場合には、例外的に道との間に塙・前庭がある。しかしそのほかの構成は間口の小さい町家と同じといってよい。また、隣家とは接して建つ。さらに、後ろの道に面したクラは、下見板張りの覆い屋を架けてあるため、そのほかの家と連続性のある町並みを形づくっている。

以上のように相川には、町全体の計画(都市計画)から決まってくる道路パターンや敷地条件があり、その構成に対応した住宅のつくりにかたが存在するのである。

そして、その住宅の配置形式は、地形条件に対応したものであった。それは特に長板の住宅に特徴的に表れていた。

また一方、道路のパターンにも対応したものであった。屋敷の前後両側で接道する敷地の場合には、クラの配置をトオリニワと組み合わせることで有効に対処していた。さらに、そこで使われたクラの覆い屋は、町並み形成の点でも意味のあるものとなっている。

このような敷地条件・地形条件と住宅形式との対応は、近世前期の計画設定から長い時間をかけて、そこに住んでいる人たちが自ら作り上げてきたものである。そして、松栄家、西山家にみられるように、その一つの完成された姿が大正時代に訪れたと考えられる。

こうした住宅の特徴は、近世・近代を通じてつくられてきたものであるだけに、相川の歴史の成果といえる。そしてまた、かけがえない相川の財産なのではないだろうか。